特集

2013年　財政学研究会春企画講演会

「ケインズの経済思想の現代的意義」

本特集は、2013年4月20日に京都大学法経第3教室において開催された財政学研究会主催の春企画による間宮陽介先生の講演会の記録である．講演冒頭，先生がいかにケインズを研究するに至ったかを当時の時代背景を交えつつご紹介された．当時，宇沢弘文先生や西部邁先生，岩井克人先生のように，それぞれ独自の方向性を打ち出される中で，先生はポランニーやケインズを学ぶ中で「市場と非市場」の問題を生みだされた．先生は著名なケインズ研究者でありつつ，その一方でコモンズ研究をされているが，両者が「市場と非市場」という形でつながっていることがわかる．

ケインズは、20世紀の前半にいわゆる貨幣の下方硬直性が非市場的な要素の一例であり既にその問題が放置できないことであることに気づいていた．ところが一般的には市場経済化の動きは加速されており，もともと非市場的な要素が強い領域である医療でさえ、自由化の名のもとに市場化が検討されている．患者はお金さえあればすべての欲求を満足できる消費者でなければ，医者も単なるサービスを提供する供給者ではなく，様々な義務を自ら負うことがある．これらの非市場的な要素は、患者と医者の関係は単なる売り買いではなく，共同で健康と言う価値を産み出していることになる．

間宮先生は社会学の知見をケインズと結び付け，市場化による貨幣経済の浸透に歯止めをかけることの重要性を提起された．20世紀初頭にケインズが成し遂げた偉業を今日的に捉え直すことの大事さを学べるとても意義深い講演であり、そのことは，活発に行われた質疑応答においても窺うことができた．

『財政と公共政策』編集委員会